

保育者はどのようにして散歩コースを決定しているのか

—子ども理解をもとに園外環境を活用する保育者の実践知—

石田淳也¹, 松延毅², 中村知嗣³, 杉本翔平⁴, 松延摩也子⁵, 本田由衣⁶, 藤田清澄⁷,
香曾我部琢⁸

¹メリーポピンズ朝霞台, ^{2,5} 社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園, ³ 学校法人恵愛学園愛泉幼稚園,
⁴ 学校法人藤幼稚園, ⁶ 武蔵野短期大学, ⁷ 盛岡大学, ⁸ 宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では、保育者が日常の保育実践において散歩コースをどのような要因から影響を受けて決定しているのか、実際の散歩場面の観察とその映像データを刺激素材として用いた半構造化インタビューによって言語データをサンプリングする。そして、その言語データをM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)によって分析することで、散歩コースの選択と決定に至るプロセスを明らかにする。その結果、保育者が日常的な保育実践における幼児への理解を核として、子どもの数や職員数、コースへの理解など複数の要因の影響を受けつつ、散歩コースを日々の状況変化に応じて即時的に決定していることが示唆された。

キーワード: 散歩、幼児理解、園外環境、M-GTA、半構造化インタビュー

1. 問題と状況

1.1 園庭がない保育所について

平成27年度よりスタートしている「子ども・子育て支援新制度」の中で進められている家庭的保育事業に関する法令、特に『家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準』^[1]においては「屋外遊戯場(当該事業所の付近にある屋外遊戯場に代わるべき場所を含む。)」と述べられているように、屋外遊戯場の設置については義務付けられているわけではない。このことから園庭のような屋外遊戯場をもたない保育所も多く見られるようになってきている。このような保育所における課題として、保育の環境をいかに確保していくかについて着目されてきている。特に駅型保育所における保育の環境に関しては多くの先行研究が見られる(杉川・中川ら, 2013^[2]、岩崎・赤木ら, 2007^[3]) が、いずれの研究においても空間的制約の厳しい現状を踏まえ、いかに保育環境を保障するかについて言及している。

1.2 散歩に関する先行研究

太幡・古川ら(2013)^[4]は先行研究を基に「園庭の乏しい保育所では数少ない屋外保育の機会として散歩の重要性が増し、保育の環境として、施設のみでなく、周辺環境に依存する傾向が強まっている」と述べている。つまり、上記したような駅型保育所においても同様な傾向が考えられる中で、散歩の重要性は高まっていると考えられる。菊地(2010)^[5]は、幼稚園・保育所における散歩活動の実践例とその特色についての研究の中で、幼稚園教育要領や保育所保育指針と散歩活動との関係性にも言及しつつ、散歩活動の持つ教育的意義について述べている。菊地は「散歩活動のもつ多様性と多角性」について、自然的事象に限ってもその種類に富むこと(多様性)と時期的な違い、時間的な違い、方向的な違いで触れる事象に変化が生じやすいこと(多角性)を挙げ、「事象に対する興味関心を向上させ、結果として散歩活動の価値を高めている」と考察している。また、太幡・古川ら(2013)はアンケートによる基礎データの収集と実際の散歩に同行した観察調査を基に散歩活動を定量的に分析している。その中で小規模な福祉施設が増加し、地域環境の重要性が増す中で

子どもの視点から街路環境や地域社会を捉え直す必要があると考察している。つまり、今まで多くの園が実践してきている散歩活動の重要性を再度検討するとともに、園庭がない保育所における散歩活動についても再度見直す必要があると言える。

1.3 散歩における保育者の思い

では、そのような散歩に対して保育者はどのように捉えているのだろうか。太幡・古川ら(2013)によるアンケート調査の結果から、「保育者は散歩を通じて地域と触れ合う事を意識している」と述べている。また、散歩の効果については「体力づくり」や「自然とのふれあい」であると捉えている。さらに、散歩のルートを決める際は、「園児の安全」と「目的地」を重視しているとの結果が見られた。しかし、これらの結果はアンケート調査によるもので、それぞれがどのように意味づけられ、決定されているのかについては明らかになっていない。また、その日毎の散歩のルートをどのように決定していくかのプロセスについて扱った研究はまだない。しかし、上記のように重要性が高まってきている散歩活動について保育者がどのように捉え、意味づけ、決定していくのかについて明らかにする必要があると考えられる。

そこで、本研究では、園庭がない保育所で働く保育者を対象に、散歩についてどのように捉え、意味づけているのかについて明らかにする。また、散歩のルート選択におけるプロセスについても明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 サンプルング方法と手続き

砂上(2015)^[6]では、片付け場面における保育者の潜在的な実践知を明らかにするために、Tobinが開発した「多声的エスノグラフィー」の有効性を示している。そこで、本研究においても、散歩のビデオ映像を撮影し、そのビデオ映像を刺激素材として用いて、フォーカス・グループ・インタビューを実施。同じ散歩の映像を通して、散歩のコース決定プロセスについて、半構造化インタビューの形式でインタビューを実施し、言語データをサンプリングした。

2.2 研究協力者

保育経験5年～20年以上の研究協力者5名と研究者が共にフォーカス・グループ・インタビューを行った。

2.3 A 保育園について

A 保育園は、最寄の駅から徒歩1分の場所にあるマンションの一階にある株式会社運営の駅前型保育所である。平成15年4月に開園し、平成27年4月より認可施設へと移行した。定員は32名(0歳児9名 1歳児11名 2歳児12名)で、保育面積165.46㎡。職員の構成は園長1名、保育士14名、栄養士1名、以上合計16名となる。

1日の保育の流れは下記の表1を参照、近隣の公園との位置関係は図1を参照、公園の概要については表2を参照。

表1 A 保育園の1日の流れ

時刻	活動内容
7:00	順次登園
8:30	朝の会 排泄 散歩準備
9:15	散歩出発(夏季是水遊び有り)
11:30	帰園 昼食準備
11:45	昼食
12:45	午睡
14:45	起床 排泄
15:00	おやつ
15:30	午後の活動(散歩、室内活動)
17:00	降園準備 順次降園
20:00	閉園

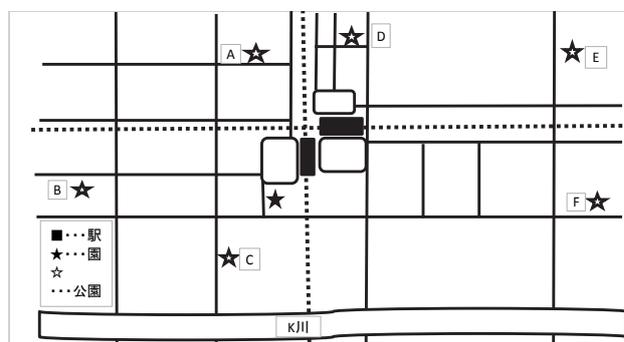


図1 A 保育園の近隣図

2.4 言語データ分析方法と手続き

A 保育園の保育実践における散歩活動の場面の映像を刺激素材として、複数の保育経験者同士が

互いの考えや意見を重ね合わせるフォーカス・グループ・インタビュー形式で半構造化インタビューが実施された。そこで、相互作用を重視するシンボリック作用論を基盤として、GTAのように切片化せずに文脈を重視した解釈を行う「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)」^[7]を用いることとした。

2.5 映像データの散歩実践の概要

2016年8月12日(金) 9:30~11:00

2歳児は「友達と一緒に水遊びや戸外遊びを楽しむ」という指導計画のねらいのもと過ごしている。お盆時期の祝日と土曜日の間ということで、園全体の登園人数が4割ほどだったため、0~2歳児の全園児で散歩が行われた。夏季は水遊びの時間を取っており、指導計画では園周辺を散歩してから帰園して水遊びを行う予定であったが、この日は曇りで気温もあまり高くなかったため、戸外での活動を多めに時間を取られた。程よく日かげがあり、夏でも比較的過ごしやすいF公園へと向かっていった。公園では日かげのある砂場で遊ぶ子どもが多くいたが、F公園内の木の根元に現れていたセミの幼虫が出てきた穴や弱っていたセミを見つけると、多くの子ども達が集まり、セミや

出てきた穴に触れたり、弱っているセミを元気にしようと考えたりしていく姿があった。帰園する途中では地域の方に会い、畑で取れたばかりのトマトを分けていただき食べ、園へと向かっていった。

3. 結果と考察

3.1 散歩コース決定プロセスの概念図

M-GTAの結果、散歩コース決定プロセスについて、7つのカテゴリとそれぞれにサブカテゴリが示され、それらの概念の関連性を示した図として(Figure 1)を作成した。散歩コース決定に影響を受けたカテゴリとサブカテゴリ、ラベルを示して、その影響について説明を行う。なお、カテゴリを《 》、サブカテゴリを〈 〉、ラベルを[]内に示した。以下、概念とその関連性について説明する。今回の分析で抽出されたカテゴリ、サブカテゴリの例を表3として示す。

3.2 保育者の思い

《保育者》は保育を实践するうえで、保育の拠り所になる〈保育の基本理念〉があり、法人の方針の一つに「体力づくり」がある。そして〈子ども理解の視点〉〈主体性重視と散歩円滑進行ストラテジーとの葛藤〉が示された。このことは、目の前の子どもの姿、思いに寄り添っていき、いかねばという思いに保育者は日々自分の気持ちと葛藤しながら保育に向き合っていることが考えられる。

また、〈保育計画〉に基づき子どもの〈年齢、発達に応じた援助〉は当然のことだが、[運動経験と健康配慮的価値としての散歩][人員配置的違いによる計画への配慮]等職員数が絡んでくることが示された。

3.3 コース決定に関わる内容として

要因として〈子どもの数〉に[幼児数がもたらす職員数の重要性]が示され、コース決定に影響をしていることが考えられる〈子ども理解〉[その日条件に基づいてルートを決める保育者]が示され、安全を確保できる〈職員数〉や物理的制約からくる〈園庭・園舎〉が保育の流れに影響し

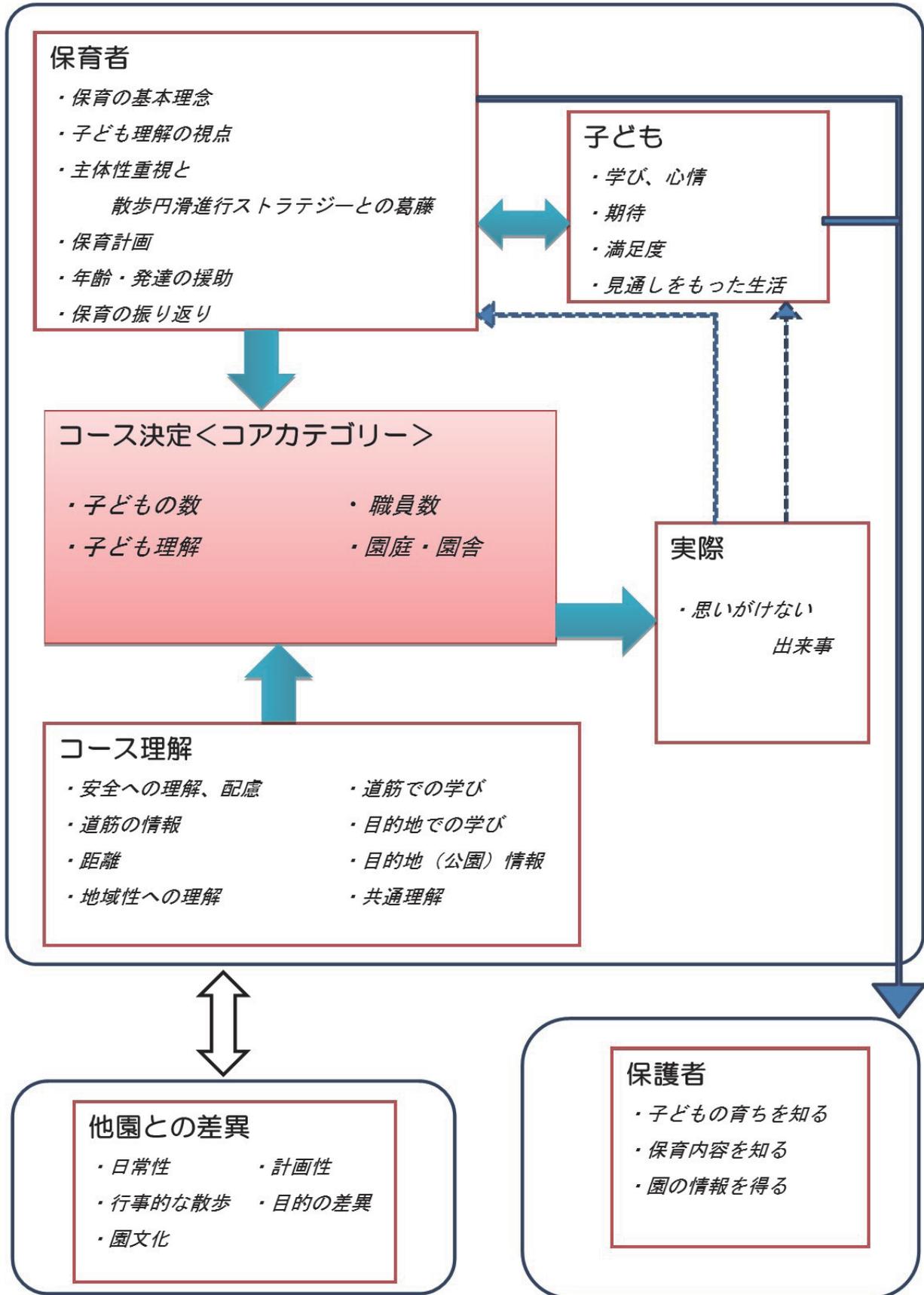
表2 近隣の公園の概要

公園名	距離	特徴
A公園…	270m	木などの自然や固定遊具が多く、日陰もある。見通しは良くない
B公園…	370m	広く見通しが良い、日かげが程よくある。地域の利用も多い
C公園…	270m	園から一番近い。遊具や日かげが少ないが広さは程よくある。
D公園…	530m	広く、遊具も多くある。日陰も程よくある。近隣の保育園も利用することが多い
E公園…	700m	園からの距離がある。広く遊具や自然が多いが見通しが悪いため死角が多い
F公園…	500m	公園内に土手があり、坂を上り下りして楽しむことができる。日陰が程よくあり、過ごしやすいが、たばこなどの危険物が落ちていることが多い。

表 3 生成されたカテゴリー、サブカテゴリー、ラベルと言語データ

保育者	保育の基本理念	乳児の公園内での保育	H:0歳の先生は(バギーを)押して歩いているんですか? J:歩いたり、土手の芝生のところでおろしてあげて座ってますね。
		成長発達の確認	M:あの階段の子は J:一応1歳児なんですよ、1歳児の秋生まれなんですけどまだ歩けないので、つまり立ちがやっとです
		自然を活用する遊び	
	子ども理解の視点	生き物との長時間の関わり	J:この日はこのあとはずっとセミ関係で過ごしていましたね K:セミを捕まえて、どのくらいここにいるか、死んでやるパターン。1時間ぐらいいたかな・・・いたいた 帰って来るまでに1時間半ぐらい
		子どもの発想への感心	
		保育者の援助の成功	J:「抜け殻から出てきたんだよ」話したら、「なんで出てきたの?」「なんでだろうね」 「たぶん、セミさんおトイレに行きたいからでてきたんじゃない」そういう想像って面白いなーと N:これはこれでよかったよね。これでもってイルカ J:いつもは砂場で遊んだりするが、せっかくこの公園だったので少し、砂場だけでなく、上へ行ってみようか、確かに行ってみようかと促した所はありました。ここに行くって決まってから、自然が1番多いところ、公園が何か所もあり、葉っぱで覆われていて長く遊べるような所も
	主体性重視と散歩円滑進行戦略一との葛藤	子どもの気持ちの尊重を優先する保育者	M:子ども達ここが重要ですよみたいなのはあるんじゃないですか。好きな子といけるから散歩も楽しくなるのか、どうなるのかっていう所、確かにうちの園でもある。つなげなくてへこんでいる子、前、保育仲間がメールで出していたけどそういうのはうちでもある。でも大事にするのはありかな
		報酬としての楽しさを生かした散歩時の保育者の戦略	J:ここを歩いてたりだとかなんとなく他の事に目が向いていく、これからどこどこいくの楽しみだな〜とか、ここ橋の部分は電車の上なんです、下に電車が走ってるんで、だから電車がみれるよ〜って言ったらむくって上がってみたりとか、だからこれから行くその先には楽しいことが待っているんだよっていうのを必死で伝えて気を紛らわせながら N:切り替えさせる J:そうですね、だからぼくも一番最初の頃は近くのとこに散歩に連れてって、散歩にでかけると楽しんだと言うのをまず伝え分かってもらいながら、少しずつ楽しくいけるように、イメージをもって行けるように、これから何何するんだよっていうふうな感じですかね。歩き出しの部分で気にしてるのは
		保育の慣習的隊列形成文化	K:Hさんはどうですか?歩き始め H:あの、私、幼稚園が長いので、大体決まった人がっていうのでお隣さんいますかっていう感じで納得して、 K:確かにそうかも H:で、集合の時にも必ずお隣さんいますかって

図2 散歩コース決定プロセスの概念図



ていることが示された。これらは相互に関係性をもっていて、当日の条件に基づいて決定している。条件としては安全を確保できる保育者の配置、子どもの数もたらす制約、子ども一人一人の健康状態、発達状況等の理解が考えられる。また、園舎が狭く、広く使用するため交代制で散歩に出ることもあることが示された。背景として、都市部の保育環境の在り方、建物の空間的特性と保育の流れ、認可園の条件としての公園の存在や公園の制約〈公共施設での保育実践の課題〉が示された。

3.4 コース理解

〈安全〉に散歩をするには、〈子どもの人数と保育者の人数〉の配慮が必要不可欠であることが示された。また、どのような〈道筋〉かにより〈道筋での学び〉があり、どのくらいの〈距離〉〈選択可能な道筋〉か、交通量の多少など〈道筋の情報〉が示された。また、〈地域性への理解〉〈目的地情報〉〈目的地での学び〉としては、いろいろな地域資源の活用が考えられる。

散歩中の〈地域の人々との出会い〉〈道筋での学び〉は、子どもにとっても園にとっても大事にしていることが示された。散歩に出かけることで、地域の人々とのふれあいが生まれ、散歩を通して身近な自然や季節を感じたり、交通ルールを学ぶことができたりしている。〈目的地での学び〉は、非日常的な環境にかかわったり、思いがけないことに出あったり、発見したり興味・関心が広がる。〈目的地（公園）の情報〉として、公園の保育環境的位置付けはどうか、活動するための条件〔空間、砂場、遊具、自然物等〕について、職員間で情報の共通理解を図ることが必要であると考えられる。

3.5 実践に関わる内容として

要因として〈ねらいの達成〉があげられるが〔ねらい達成への課題〕も示された。今日は起伏のある山に行って登ったり滑ったりを楽しもう、十分に体をつかって遊ぶなど計画を立て、計画の中から実践している。〔子どものイメージ形成を目的とした確認の習慣化〕また、散歩の醍醐味として〈思いがけない出来事〉に遭うことがある。ビデオの中にあつたセミの死骸を発見したことで、セミへの興味・関心をもったり、自然物にも目を

向けたり視野が広がっていることが理解できる。

3.6 子どもに関わる内容として

要因として〈散歩に行く楽しいんだ〉どこにいくのかなという散歩に対して子どもがもつイメージと〈学び、心情、期待〉が示された。このことは保育者が立案する計画と緻密な配慮が考えられる。時には、誰と手をつなぐか、子どもの相性に基づく隊列形成と子どもの意見不一致による散歩の困難さも示された。好きな友達と行けるから散歩も楽しくなることが考えられる。出かける前の留意点の一つとして、保育者は子どもの思いや状況から気分転換を図ったり、気持ちを切り換えさせたりして子どもの心情を受け止め、気持ちよく出かけられるようにしている。背景として〈保育者の気持ちのゆとり〉は〈子どもの満足度〉に影響するので大切である。〔道端の草花、子どもの気づきへのゆとりある対応等〕

3.7 保護者に関わる内容として

要因として、保護者は子どもや保育者からの情報により、〈子どもの育ちを知る〉〈保育内容を知る〉等今日散歩に行つてセミを見つけたこと、地域の方からトマトをいただいたことなど聞いたり、掲示された写真を見たりして保育内容を知ることが示された。〔散歩の教育的可視化〕により、園での我が子の成長を保育者とともに喜びあえている。散歩は安全面でのリスクがあるが、良さを生かしていくことも大事だと考える。地域の方から声をかけられるようになり、地域の人々と仲良くなれるきっかけにもなることが示された。

3.8 他園との差に関わる内容として

要因として、散歩の〈日常性〉〈園文化〉により、毎日のように散歩に出かけていることが示された。背景として都市部の保育環境、認可園の条件としての公園の存在（園庭がない）が考えられる。園庭があり、園庭で満たされているから散歩には行かない、子どもの人数よりの制約があり行きたくても行けないなど園文化の違いが考えられる。

また、〈行事的な位置付けの散歩〉、遠足の予備的段階の散歩など目的の差異が考えられる。地域の差異としては、田舎の限定的な道筋と地域資

源 都市部の多様な道筋と地域資源等が考えられる。

4. 総合考察

4.1 散歩に対する保育者の多様な思い

今回の研究において、保育者は散歩コースの決定プロセスの中で、その園の保育理念や保育計画、幼児理解などを参照しながら、散歩に関する様々な情報と関連づけ、散歩のコースの決定をしていることが明らかになった。またその中で園舎などの空間的な制約によって散歩に行かざるを得ない状況が存在していたり、散歩当日の子どもの状況や職員数によって柔軟に散歩のコースや目的地を決定したりしていることも分かった。

加えてM-GTAでの分析の結果、散歩への取り組みについては他園との差異も存在していることも明らかになった。これらのことより、散歩に対しては保育者の多様な思いが存在していると考えられないだろうか。

その散歩への思い多様化の背景に存在するものの大きく分けると二種類あるのではないかと考える。一つは散歩に対する園の考え方である。インタビューの中でも意見が挙げられていたが、保育所における散歩と幼稚園における散歩とは、計画や実践において違いがあることが窺えた。

今回の散歩事例のように、散歩出発直前の状況に応じてその場でアドホックに散歩への計画がなされていくのに対して、綿密な計画のもとで下見なども行ったり遠足などの行事の前段階的な位置づけで行われたりする散歩も存在している。すなわち、保育所や幼稚園、認定こども園などの施設によって散歩への考え方がそれぞれに存在していると考えられる。また施設の種類に限らず、園ごとの保育理念もその園の散歩への取り組みに影響があることが考えられる。

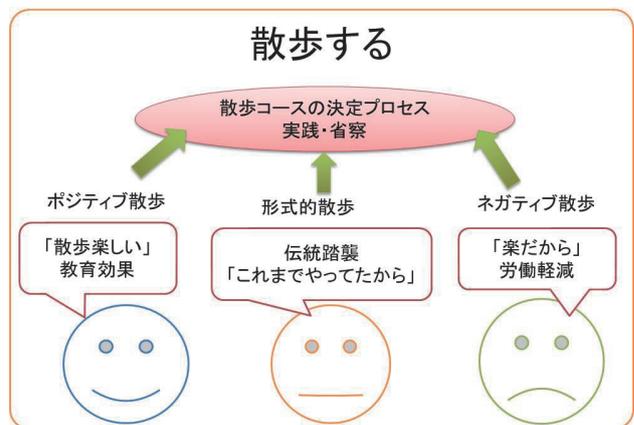
もう一つは散歩に対する個々の保育者の思いが存在していることである。保育歴や時期、保育時間、状況などによって保育者自身も散歩に対する思いに違いがあるのではないかと考えられる。

4.2 散歩に対する思いの様相

これまでのことから、園の散歩への考え方と個々の保育者の散歩への思いは図3と図4のように説明できる。

図3は園の考え方として「散歩する」ことに対して、個々の保育者の中での肯定的や形式的あるいは、消極的な姿を示したものである。散歩に対して肯定的で、散歩をすることでの教育効果も理解し、散歩に対して積極的な姿勢を示す「ポジティブ散歩」の思いがあるのに対して、散歩に行くことで自身の労働軽減を図ったり、教育的な意図を考慮したりしないで行う場合を「ネガティブ散歩」と位置付けた。その間には、保育者自らの散歩への取り組みではなく、園がこれまで行っていたことを引き継ぎ、伝統踏襲的に散歩を行う「形式的散歩」が存在しているのではないかと考えられる。

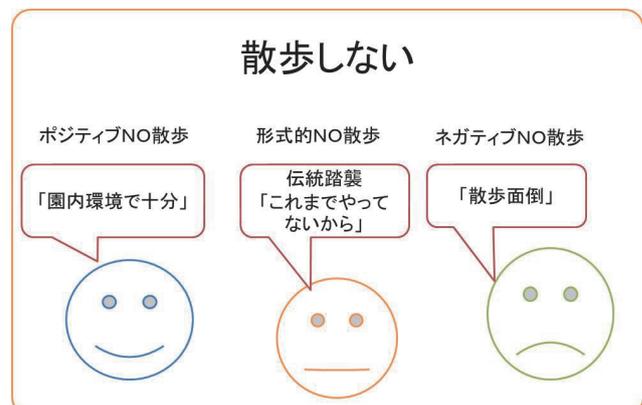
図3 「散歩する」ことに対する思いの様相



これらの思いは個々の保育者によっても異なるだけでなく、一人の保育者の中でも状況や体調などによって変化することも考えられる。

一方、図4で示したように上記のような思いの様相は園の保育方針において「散歩をしない」場合でも同様に存在しているのではないかと考えられる。

図4 「散歩しない」ことに対する思いの様相



園内の保育環境が豊かに整っており、園外に出る必要性が少ない場合には散歩しないことに対して肯定的に捉えていると考えられるため、「ポジティブNO散歩」と位置づけた。一方、その対極には散歩そのものに教育的価値なども持たず、散歩実践に対して否定的な意識をもっているために散歩をしない「ネガティブNO散歩」の存在があるのではないかと考えた。

さらにその二つの間には、園としてこれまで散歩を行っていないために、散歩をしないことに対して疑問や関心をもたない「形式的NO散歩」の思いも存在しているのではないかと考える。

散歩をしないことに対する思いの様相についても、保育者間での意識の違いがあることが考えられるだけでなく、個々の保育者自身の中でも状況に応じて「ポジティブNO散歩」や「ネガティブNO散歩」、「形式的NO散歩」の思いが変化していることも考えられる。

以上のことより、保育の中での散歩について、その意味付けは園の置かれている環境や状況、保育者の思いなどによって多様に存在するのではないかと考えられる。すなわち、「散歩」そのものの賛否を考えていくのではなく、園の保育環境の多様性に応じて、散歩の意味付けを考えていくことが大切なのではないかと考える。

5. まとめ

本研究では、園庭の無い保育所における散歩において、保育者が日々ねらいを持ち保育を行っていく中で、その日の気象や園の状況、子どもの気持ちを考慮し、制限のある園の環境と保育への思いに葛藤を抱きながらも、子どもの育ちが十分に保障されるように地域の環境を活かしながら、保育者が日々の活動を行っていることが明らかになった。また、生活リズムの違う様々な年齢の子ども達が落ち着いた気持ちで生活をしていくことができるよう、散歩を用いて園内環境を調整しているという園庭の無い園の実情も明らかとなった。散歩活動について見直すことができ、散歩に対する新たな視座を得ることができたと考えられる。

また、今回の散歩実践のねらいでは無かったが、公園で偶然に弱ったセミを見つけ、「なぜ弱っているのか」と考える子どもの学びの姿があった。このことについて「子どもは大人が想像しない、思

わぬものを偶然に発見する才能があり、保育者は意図していなかったが、散歩によって生み出される学びがある」と橋本(2016)が示唆した。

今後は、子どもにとって散歩はどのような経験となり、学びがあるのか、そして保育者がその学びを捉え散歩活動に反映しているのか検証していきたい。

6. 引用文献

- [1] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準, 2014
- [2] 杉川真美他: 駅型保育園における子どもの遊び空間に関する調査研究:P's スマイル保育園をケーススタディにして, 学術講演梗概集(建築計画), 405-406, (2014).
- [3] 岩崎 裕二他: 駅型保育所における遊び環境に関する基礎的研究, MERA Journal=人間・環境学会誌, 10(1), 71, (2007)
- [4] 太幡英亮他: 保育園児の散歩行動と街路環境の関係: 名古屋市認可保育所での散歩行動観察を通じて—日本建築学会計画系論文集 78(689), 1533-1542, (2013)
- [5] 菊池達夫: 幼稚園・保育所における散歩活動の実践例とその特色, 北翔大学短期大学部研究紀要 48, 1-13, (2010)
- [6] 砂上史子他: 幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知—時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析—日本家政学会誌 66(1), 8-18, (2015)
- [7] 木下康仁: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技, 富山大学看護学会誌 6(2), 1-10, (2007)
- [8] 橋本祐子: 園外環境の保育実践への活用と保育者の実践知—保育者はどのようにして散歩コースを決めるのか, 日本乳幼児教育学会第26回大会研究発表論文集, 90-91, (2016) 自主シンポジウムにおけるコメントより